

暴力・時間・貨幣

『骨董屋』序論

志田 均

1

『骨董屋』は暴力の物語である。この小説を読んだ者にとって、それは自明のことかもしれない。ディケンズが創造した悪役のなかでもその邪悪なイメージでは屈指の人物であるクウィルプが登場し、人間離れしたエネルギーを発散させながら他の人物を威圧してまわり、ときには実際に殴り合いの喧嘩などもしてしまうのだから、それは誰の目にも明らかかもしれない。しかし、『骨董屋』が暴力の物語だというのは、そういった意味においてではない。暴力を腕力のような狭い意味に限定せずに考えれば、この小説は、クウィルプの登場する場面にかぎらず、全編が暴力の物語だといえるのである。クウィルプとは対極的な存在である可憐な少女ネルもまた、その例外ではない。といってもそれは、単にネルが暴力の犠牲者 暴力を誘発し、暴力を受動的に表現してしまう存在 だからという意味においてだけではなく(もちろんそうした側面は大きい) そんなネルもまた、ある意味では暴力に積極的にかかわっているという意味においても、例外ではないのである。

人間社会と暴力とは切り離せない関係にある。社会という秩序体が生成するためには根本のところでは暴力の発動が見られ、またそれを存続させるためにも暴力は絶えず駆動している。ベンヤミンの言葉を借りれば、暴力には「法措定的」な機能と「法維持的」な機能とがある¹。こうした暴力に浸された社会のなかで生きるには、どんな人間も暴力と無縁であることはできない。しかも、人間の存在そのものに暴力は潜在しているのだから、誰も暴力を行使することなしに生きることは不可能といえる。それは必要悪といったようなレベルの問題ではない。暴力の問題はそもそも善悪の彼岸の問題なのだ。少なくとも、善と悪との区別の付けにくい問題である。

ディケンズの小説、とくに『骨董屋』も含まれる前期の小説においては、登場人物たちの善玉悪玉の相違ははっきりしている。そして善玉悪玉それぞれを代表する人物が必ず一人ずつ存在している。『骨董屋』でいえば、善玉を代表するのはネルであり、悪玉の代表はいうまでもなくクウィルプである。そして、両者の行為は善悪の色分けをすでに帯びた形で提示される。ネルの行為はすべて善なるものであり、クウィルプの行為はすべて悪なるものである。少なくとも、読者はそうしたバイアスのかかった叙述を介してしか彼らに接近することはできない。その結果、知らず識らずのうちに読者は彼らのどんな行為をも善悪に色分けされた視線で眺めることになる。

しかし『骨董屋』には、すでにそうした善悪に色分けされた視線で眺めても捉えきれな

い人物が登場している。それはほかでもない、この小説の題名ともなっている骨董屋の主人で、ネルの祖父でもあるトレント老人である。この老人のまわりには善悪の判断では捉えきれない力が渦巻いている。それはまさに暴力といえるだろう。本来、善悪の彼岸にあるか、あるいは善悪の此岸にあっても善悪双方に浸透している暴力を、この老人ほど生々しく体現している人物はこの小説中ほかには見当たらない。そうした意味で、このひ弱な老人はこの小説中最も暴力的な人物であり、この小説に潜む暴力のダイナミズムを解き明かすための鍵となる存在といえるだろう。

この老人の存在はこれまであまり注目されることがなかった。『骨董屋』に登場する主要人物間の一種の勢力図をいえば、一方に善玉を代表するネルがいて、他方に悪玉を代表するクウィルプがおり、そのいわば中間項としてスウィヴェラーの存在がある。これまでの多くの論考も、その結果当然かもしれないが、この三人に集中してきた²。老人の存在は表面的には確かに端役的である。しかし、ネル(善)とクウィルプ(悪)の中間項としてのスウィヴェラー(善と悪とのいわば折衷)とは違った意味で、この老人はネルとクウィルプの中間項あるいは媒介項として重要な役割りを担っているといえる。つまり、この小説に潜む暴力を追求していくと、老人の存在はむしろ前面に浮び上がってきて、ネル(善)とクウィルプ(悪)の双方にまたがる暴力を媒介する存在として立ち現われてくるのである。

この小説が暴力の物語だというのは、以上のような意味合いにおいてである。暴力に注目することによって、作者ディケンズの差し出す善悪に色分けされた視線からは見えてこないものが、われわれには見えてくるかもしれない。作者の提示する善悪の視線のピントをずらすことによって、『骨董屋』という作品の地平を限っているかに見える善悪の対立の向こうにまで、われわれは視線を届かせることができるかもしれないのである。

2

ロンドンの場末で骨董屋を営んでいるトレント老人は、「もうじき十四」になる孫娘のネルと二人暮らしをしている。そこには、貧しいながらも楽しい我が家といった雰囲気はなく、ただただ時代に取り残されたうらびれた雰囲気があるばかりだ。そうした雰囲気を醸し出しているのは店内に並ぶ古びた骨董品だともいえるが、それよりも骨董屋の主人の気分がむしろそこには反映されている。骨董品のように古びたこの老人は「蒐集品のなかには、彼と調和しないものは一つもなかった。彼よりも古びてすり減っているように見えるものも一つもなかった」(第一章、四七頁)³、しかしながら骨董品のようにそこに自足してはいない。何かじりじりと内にくすぶるものをこの老人は抱え込んで。そのくすぶりの原因は孫娘のネルであり、老人はネルの将来を気づかって心労が絶えない。つまり、骨董品とは対照的に瑞々しい命の盛りにある孫娘の将来に気をとられてしまうあまりに、老人は骨董品の秘めている「過去」から目をそむけてしまい、その結果主人から取り

残された形の骨董品はただただその古さの消極面ばかりを際立たせてしまっているのだ。それは、ネルと対置されることによって、いっそう明白なものとなる。対置によるコントラストの強調はディケンズの重要な文体の一つであるが、そうした問題もからめながら骨董屋に置かれたネルの状況について、この小説の第三章までの語り手であるハンフリー親方を介して、ディケンズは次のように書いている。

私たちは、諸々の印象を事物の外観によって受けとる習慣にあまりに馴染んでいる。こうした印象は反省によってのみ生み出されるべきであるのだが、しかし、事物の外観という視覚的な助けがなければ、私たちはしばしばそうした印象を捉え損ねてしまう。だから私は、骨董屋の店内にごたごた積み上げられているのを目にした奇妙な品物の山山がなかったならば、この一つの印象にこれほど強くとりつかれていただろうかとはわからない。これらの品はその子と結びついて私の心に群がり、いわば彼女のまわりに集まって彼女の置かれた状況を私にまざまざと示したのだ。私は彼女のイメージを彼女のイメージとは異質で、彼女の年頃の少女の情感から最もかけ離れたあらゆる物にまわりをすっかり取り巻かれた彼女のイメージを、私は苦もなく思い浮べた。こうした空想の手助けとなるものがまったくなかったとしたら、そしてその様子に異常なところも異様なところもないありふれた部屋に彼女がいるところを想像しなければならなかったとしたら、私は彼女の奇妙で孤独な状態にこれほど強い印象を受けることはおそろくなかっただろう。彼女はいわば、一種のアレゴリーのなかに存在しているようだった。こうした形象のなかに身を置き、私の関心をあまりにも強く引いたので、(すでに述べたように)私は彼女をどうしても頭から振り払うことができなかった。(第一章、五五 六頁)

引用の最初の方で、われわれが受けとる「印象」は「反省によってのみ生み出されるべき」で、「事物の外観」にあまりに頼りすぎることはよくないといったようなことがほのめかされているが、「印象」が「反省によってのみ生み出されるべき」だというのはどういうことなのだろうか。おそらく、正しい「印象」は感覚的な直観だけでは捉えられず、「反省」というなんらかの悟性的な判断が伴わなければならないということなのだろうが、しかしそれにしても、「印象」というものは、本来的に悟性の領域よりも感性の領域に属するものではないだろうか。さらにいうならば、「反省」という悟性的な判断それ自体が「事物の外観」といった感性の領域とまったく無関係ではありえず、「事物の外観」と「反省」とはその根本において意外と深く結びついているのではないだろうか。

「反省」を意味する“reflection”には、「反射、反照、反映」といった感性の領域に関わる意味もあり、しかもそれは「事物の外観」という視覚的なものに密接に結びついている。とくに「反照」などは、対置によるコントラストの強調というディケンズの重要な文体を説明するには有効な言葉であり、骨董品に取り囲まれたネルが強い印象をもたらすのも、骨董品のもつネルとは異質で対照的なイメージによる「反照」の為せる技といえ

るくらいである。その意味で、骨董品に取り囲まれたネルの「印象」は、「反照」という意味での“reflection”によって生み出されたということができ、「印象は反^{リフレクション}省によってのみ生み出されるべきである」という文章はその意味からいうと、「事物の外観」と矛盾することなく正しいことをいっていることになる。

また逆に、「反省」という悟性的な行為自体にも「反照」という感性的な要素が含まれていて、骨董品に囲まれたネルの「印象」は「反照」という感性的な意味での「反省」によって生み出されたということもできる。つまり「反省」とは、端的にいえば、ある価値判断に立って過去を現在から見直すことであり、それを感性的に言い表せば、現在の側から価値判断という光を過去に浴びせることによって照り返ってくる過去の姿すなわち過去の「反照」を得ることだといえよう。その意味で「反省」とは、時間の次元に生じる価値観の「反照」であり、時間と空間という次元の違いと悟性と感性という範疇の違いはあるものの、その働きにおいて「反省」と「反照」とは極めて類似したところがある。

そして、これをさらに敷衍すれば、「反照」の方にも逆に「反省」的な要素が含まれているところがある。つまり、「事物の外観」という視覚的なものが「印象」を形成する際、その「印象」は純粋に視覚的なものだけによって形成されるわけではなく、「印象」を形成する人間の精神あるいは心理領域がすでに含みもっている価値判断の素地のようなものを基にせざるをえない。例えば、なにかを見る人間の精神（心理）状態が見られるものの「印象」に大きな影響を及ぼすことはよくあることであり、見る人間の精神（心理）状態といったものが見られるものの価値判断の素地を成しているといえる。その意味で、「事物の外観」を純粋に視覚的なものとしてだけ捉えることは、人である限り不可能なことであり、ましてや「印象」は、人間の精神（心理）領域に深く関わったものなのだから、その領域特有の負荷を帯びずにはいられない。そうした精神的（心理的）負荷は一種の価値判断であり、その意味で「事物の外観」という視覚的なものに精神的（心理的）負荷という付加価値が加えられるといえるが、これは純粋に視覚的なものに加えらる無意識的な「反省」ということができるだろう。人は感覚的な直観を、意識していようがまいが、常に精神（心理）領域のもつ価値判断の素地を通して受け取っているのであり、その結果、感覚的な直観には「反省」的な要素が必然的に含まれることになる。

こういうわけで、視線には 少なくとも、ある種の人間的な意味を不可避的に伴う「印象」に関わる視線には なんらかの価値判断的な方向づけが必然的に内包されている。その「反照」によってネルを独特な「印象」のもとに照らし出す以前から、骨董品がすでにトレント老人の精神状態を反映するものとして描かれているところに、そうした点は明瞭に表れている。その意味で、骨董品および骨董品に囲まれたネルを捉える視線には始めからある種の価値判断的な方向性が備わっており、語り手のハンフリー親方に強烈な「印象」を与える可憐な少女ネルは、あらかじめ方向づけられた視線によって見られていたのである。したがって、ネルを独特な「印象」のもとに照らし出す骨董品の「反照」は、そもそもの始めからトレント老人の精神状態を反映しているために、純粋に視覚的な要素よ

りもむしろ価値判断的な「反省」的要素を色濃く表しており、その結果、ネルを取り巻く骨董品はトレント老人の精神状態の負荷を帯びて、濃密な人間的な意味づけの空間を形成しているといえる。

ネルが「一種のアレゴリーのなかに存在しているようだった」という文章は、こうした意味からいっても重要である。「アレゴリー」とはある種の意味を前提としたものであり、ネルはそもそもの始めからなんらかの価値判断的な意味づけのなかに置かれていたという意味で、「一種のアレゴリーのなかに存在している」といえる。ヴァレリーもいうように、「はじめに『寓話』があった！」⁴ のだ。つまり、プーレが解説しているように「事物は単に斑点や空間にとりかこまれることを欲するだけではなくて、原因や時間にとりかこまれることを欲するのである。」⁵ 言い換えれば、人間的な意味に取り囲まれることを事物は人間精神に要求してくるのである。したがって、「事物の外観」は必然的に人間的な意味を帯びずにはいられず、「印象」という人間的な構成において悟性的な「反省」と感性的な「反照」は分かちがたく結びついており、上の引用での“reflection”を「反省＝反照」と捉えて「印象は反省＝反照^{リフレクション}によってのみ生み出されるべきである」と読み直すならば、この文章はまちがったことはしていないことになる。

3

先にもいったように、骨董屋の雰囲気には店の主人である老人の気分が色濃く反映している。もしこの老人が骨董品をこよなく愛し、骨董屋の主人として自足していたならば、骨董屋の雰囲気はちがったものになっていただろう。しかし老人には、なにか存在の軋みのようなものが感じられ、ネルについてとやかく言われたときに、それは反発の金切り声となって表れる。夜の散歩中に、使いに出ているネルに出くわして道を聞かれたハンフリー親方は、ネルを骨董屋まで送りとどけると、老人にむかって孫のことをもっと気づかうようにと軽くたしなめる。すると老人は、とたんに金切り声を上げていう。

「もっと気づかえですって！」と老人は金切り声でいった。「ネリーのことをもっと気づかえですって！ いやはや、わしがネルを愛しているほど子供のことを愛した者がいるというんですか」(第一章、四八頁)

この老人の言葉には何か不穏な響きがある。声の調子だけではなく、その論理の飛躍にもそれが感じられる。ネルのことを「気づかう」ことと「愛する」ことをごっちゃにし、愛していれば何をさせても構わないといわんばかりの勢いである。そして老人の論理でいえば、夜中にネルを使いに出したのもネルを愛すればこそということになる。その使いとは、実は、クウィルプのところへ金を用立ててもらったためのものだったが、それもこれもネルの将来を思えばこそということになるのだろう。

「あの娘はそのうち金持ちになります、しかも立派な貴婦人に。あの娘の助けを借りているからといって、わしを悪く思わないでください。あの娘は、ごらんの通り、それを喜んでしてくれるのです。あの娘の小さな手でできることを誰かほかの者にさせたことを知ったなら、あの娘はひどく悲しむことでしょう。わしが考えていないですって！」彼は急に怒りっぽくなって叫んだ。「いやはや、このただ一人の子がわしの人生の思いであり目的であることは神もご存じ。ところがわしに決して幸いをもたらしてはくれんです　そう、決して」(第一章、四九頁)

この時点ではまだ読者にはわかっていないことだが(ネルがクウィルプのところに借金をしに出かけていたことも含めて)、老人は借金をしてまで賭博にのめり込んでしまっているのだ。神が彼に幸いをもたらしてはくれないというのは、要するに、賭けで勝ちに恵まれていないことをいっている。骨董屋の経営だけでは先行きが不安になってきた老人は、賭博で一攫千金をねらっているうちに借金の泥沼にはまってしまったのである。そしてそれも、老人にいわせれば、かわいい孫娘のネルのためなのだ。

もっとあとの場面で、老人が借金を賭博につぎ込んでいる事実をつかみ、それをなじるためにクウィルプが夜中に突然姿を現わしたとき、老人は賭博に手を出した動機をこう打ち明ける。

「いつから始めたかだって？」額を手でなでながら彼は答えた。「わしが始めたのがいつからだったかだって？　それはほかでもない、わしの蓄えがどんなにか少ないか、それを蓄えるのにどんなにか長い年月がかかったか、この歳ではわしの余生がどんなにか短いか、そして、貧乏に伴なう悲しみからあの娘を守るための十分な蓄えがなかったなら、あの娘はどんなふう在世間の粗末な哀れみのなかに置き去りにされるかを考え始めたときからさ。そのときからさ、わしとそのことを考え始めたのは」(第九章、一二七頁)

なるほど孫娘のことを気づかった言葉といえるが、その行きつく先が「そのこと」つまり賭博であるところにこの老人の気づかいの本質が如実に表れている。またそこには、「蓄え」すなわち貨幣の蓄積に頼らなければその存在を維持できない者としてのネル、老人の保護の手を離れたならば「世間の粗末な哀れみ」にすがらざるをえない者としてのネルが規定されている。

このネルのおかれた状況こそがディケンズの興味をなによりも刺激しているといえる。それは要するに、無垢な少女が世間の暴力にさらされるかもしれない状況ということができるが、それを言い換えれば、暴力という方向性を帯びた「反省=反照^{リフレクション}」のもとでネルの存在の危うさがいっそう際立つ状況ということができよう。ネルを描く作者の視線には、あらかじめ暴力に方向づけられることによって、それ自体暴力的な強度を帯びているとこ

ろがあるのだ。作者のディケンズが意識していようがしていまいと、ネルの存在が作品のなかで際立って見えるのは、暴力という方向性を帯びた「反省 = 反照^{リフレクション}」のもとにおいてであることは確かなことである。

例えば「赤頭巾ちゃん」のことを考えてみればいい。赤頭巾の可憐な愛くるしさが引き立つのは、狼に食べられてしまうかもしれないという状況があればこそである。でなければ赤頭巾のイメージは、あれほど強烈にわれわれの印象に焼きつくことはないだろう。そしてディケンズは、こうした状況に人一倍敏感であったようなのだ。赤頭巾は、子供のディケンズにとって最初の恋人だったほどのものだから。「彼女は私の最初の恋人だった。もし赤頭巾ちゃんと結婚できるなら、私は申し分のない幸福を味わうだろうと思った」⁶。いったい赤頭巾のどこに引かれて結婚したいとまで思ったのだろう。昔話としては当然のことだが、ペローでもグリムでも赤頭巾の具体的な容姿にはいっさい触れられず、ただ「とても可愛らしい」とか「小さな可愛い」といった極めて漠然としたことしか述べられていない。子供のディケンズは赤頭巾そのものに恋したというよりも、むしろその暴力にさらされた状況に恋したといった方がいい。言い換えれば、赤頭巾を見る「視線」は、赤頭巾そのものではなく、赤頭巾のおかれた暴力的な状況の方にくぎづけになっているといえる。

同じことがネルについてもいえるだろう。夜中に祖父の使いでロンドンの街を歩き、迷子になりそうになりながらもどうにか無事に骨董屋に戻って寝についたものの、そんなネルのまわりには暴力にさらされそうになった少女の危うい雰囲気がつきまとっている（たとえベッドのなかに狼はいないとしても）。ネルを骨董屋まで送りどけたハンフリー親方の目には、そんなネルが赤頭巾のように映ったとしてもおかしくはない。ハンフリー親方（あるいはディケンズ）の「視線」には、そもそものはじめから暴力がまといついていたのである。

4

こうして見てくると、ネルが「一種のアレゴリーのなかに存在しているようだった」という文章は、ここでは「一種」をはっきりと「暴力」におきかえて読み直すことができる。骨董品に囲まれたネルの情景という「この一つの印象にこれほど強くとりつかれ」、その「関心をあまりにも強く引」かれたハンフリー親方の視線には、いわば前駆的に暴力が作用していたといえる。逆にいえば、その情景が強い印象となってハンフリー親方の頭から離れなくなるほどの強度をもたらしているのは、ほかならぬ暴力といえることができる。しかし、こうした暴力は、テキストの内部に閉じこもってはいなかなか見えてこないものである。というのも、ネルの存在を際立たせている暴力は、ある意味でテキストの外部にあるといえるのだから⁷。したがって、アレゴリーをテキストの外部との関係において成立するものと考えれば、骨董品に囲まれたネルの情景のなかに暴力のアレゴリーを見て取ることができるだろう。そう、ネルは暴力のアレゴリーのなかに存在しているのである。

この「アレゴリー」という点に注目して、ジョン・ロマーノも『骨董屋』のこの部分を考察している⁸。そのために彼はまず『ドンビー父子』に出てくる書斎におけるドンビーの描写から分析する。書斎におけるドンビーの描写は、骨董屋におけるネルの場合とちがって、換喩的だメトニミックという。つまり、書斎にある物　ピットの胸像や説教壇のような壺はそのいかめしさにおいてドンビーと性質を共有しており、それらを描くことによって書斎の主人であるドンビー自身をも描くことになり、そして隣接したものによるこの代置は修辞学でいう換喩にあたる。だから書斎におけるドンビーの描写は換喩的だとロマーノはいうのだが、しかし、書斎にある物を描くといってもディケンズはそもそもドンビーの性質に類似した物を意識的にそこに置いているのだから、その意味ではむしろ隠喩的だといえるのではないか。ロマーノもその点に気づいているようで、この場面の全体の形態は風刺的な隠喩だといっている。つまり彼は、ドンビーと書斎にある個々の物との結びつきに換喩を見、それらが織りなす意味の全体に隠喩を見ているようである。この場合、詩についてヤーコブソンがいった言葉が当てはまるかもしれない。「隣接性に相似性が重ねられたものとしての詩においては、換喩はすべていくらか隠喩的であり、隠喩はすべていくらか換喩的色彩を帯びている」⁹。これはディケンズの小説においてはとくにいえることで、ディケンズは人物のイメージを定着させる際にその人物と類似したイメージの物をその人物のまわりに配置させるということをよくおこなう。その結果、隣接性と相似性は分かちがたく結びついてしまっている。その意味で、書斎におけるドンビーをはじめとする同様な描写は隠喩的換喩ともいえるものなのだが、ここでロマーノが注目しているのはテキスト内における人物とそのまわりの物との関係であって、そうした意味ではネルの場合はドンビーの場合とは確かにちがっている。

骨董屋におけるネルの場合、まわりにある骨董品を描くことによってネル自身を描く結果になるという換喩的な関係は見られない。ネルとまわりの物にはなんの結びつきもないように見える。もしそこに「近接の論理」があるとするならば、それはネルのおかれた具体的な状況の外部にあることになり、ネルが「一種のアレゴリーのなかに存在しているようだった」というのはそうした意味においてである。「というのも、アレゴリーにおける近接の論理は、明らかにされていない外的コードに照らしてみることによってのみ理解されるからである」¹⁰とロマーノはいう。それではネルの場合、その外的コードは何かというと、それがないと彼はいうのだ。ということはつまり、ネルが「一種のアレゴリーのなかに存在しているようだった」というディケンズという言葉は否定されることになる。彼はむしろドンビーの方が「一種のアレゴリー」のなかにいるという。書斎のドンビーは、ディケンズが風刺する真の対象であるうぬぼれの強いブルジョワの繁栄を代表するモデルであり、そこには現実世界という外的コード（はっきりとは述べてはいないが）が存在しているということらしい。確かにネルの場合には、厳密な意味でのアレゴリーにおける外的コードは存在しないかもしれないが、ドンビーの場合とはまたちがった「一種の」外的コードは存在していると考えられるのではないだろうか。しかしロマーノは、そうは考えない。

彼はあくまでもテキストの内にとどまり、そこに表現の効果をむしろ見ようとする。つまり、テキストの内においても（換喩という近接の論理がない）外においても（アレゴリーを支える外的コードが存在しない）ネルは孤立してしまっており、その二重の孤立にネルの孤独の純粋性を見出し、ネルの孤独のリアリティを彼は確認するのである。

確かに面白い分析ではあるが、せっかくアレゴリーに注目しながら最終的にリアリズムの地平に落ちてしまうのは残念である。ネルの孤独の「純粋性」あるいは「リアリティ」についていうのなら、なにもアレゴリーを介する必要はなく、むしろシンボルとして捉えた方が簡単に説明がつきそうなものだ。実際、ディケンズの小説の主人公の多くは、社会における個人の孤独をシンボリックに表現している。「『ニコラス・ニクルビー』』『骨董屋』そして『バーナビー・ラッジ』の出発点はどれも同じである。つまり、その観察者とはまったく結びついていない無秩序な物や人がごちゃごちゃに満ちあふれて原子状にばらばらになっている状況の、そのまっただなかにおける孤独である。そして、これらの小説のどれもが、自分とは相入れない環境の封印された現在のなかで、絶えず自分を繰り返し演じる独自の人物が自足していないことを示している。孤独で、実質を欠き、虚ろなのである」¹¹。J・ヒリス・ミラーのこの構造分析を具体的な描写のなかに見てとろうとしたのがロマーノの試みだといえるが、分析が最終的に着地する地点では同じである。われわれはこの地点からでは見えてこないものを見ようとしている。だからアレゴリーに戻らなければならない。アレゴリーが提示する分析の糸口をしっかりと握り直さなければならない。

といっても、ここでアレゴリーにこだわるのは、アレゴリーがシンボルよりも「正しい」からではない。機能的に見ればアレゴリーとシンボルの区別はつけにくいし、その区別を純粋な理論としていい立てても大して意義があるとは思えない¹²。ここでアレゴリーという場合にはあくまで便宜的な意味においてであって、簡単にいえば、シンボルがテキストの内部において直観的に理解できるのに対して、アレゴリーはテキストの外部にそうした理解を生み出す一種のコードをもっているということである。われわれがここで見ようとしているものは、テキストの内にとどまっていたは見えないものである。テキストの内にとどまって骨董品に囲まれたネルの情景を直観的に受けとめるならば、それは「孤独」のシンボルとして受けとることができるだろう。しかしわれわれは、ディケンズの描写を支える視線を捉えようとしている。それは描写の前提となるものだろう。言い換えれば、テキストの外部にそれは属している。そして、骨董品に囲まれたネルの情景を描くディケンズの視線が暴力によって方向づけられているとすでに述べたことからわかるように、テキストの外部から射し込むディケンズの視線の根本には暴力がある。だからここでは、ロマーノとはちがひ、骨董品に囲まれたネルの情景を説明する「外的コード」はあると考える。つまり暴力である。それは「外的コード」といえるものではないものかもしれないが、少なくとも一つの読みの可能性は与えてくれるだろう。

それでは、骨董品に囲まれたネルが暴力のアレゴリーのなかに存在しているとは、具体的にはどういうことなのか。それを考えるには老人の存在を抜きにして考えることはできない。骨董屋は誰よりもその主人である老人の存在領域なのだから、そこに暴力のアレゴリーが存立するとすれば、老人が少なからず関係してくることは当然である。では、どのように関係してくるのか。

例えば、老人自身がネルにとっての性的な脅威となっているとする見方がある。純情可憐な少女を襲う暴力といえは、まずは性的な暴力だろう。英文学史的にいえば、それは小説において『クラリツサ』以来の「伝統」とさえいえる。『骨董屋』ではむしろクウィルプがそうした役割りを担って登場し、多くの論者がその点に言及しているが、ネルにとっての性的な脅威として老人の存在をあげている論者もなかにはいる。老人を中心的に扱っている例外的な論考として先にあげたアルバート・J・ゲラードのものがその代表的なものだが、そこでは「ディケンズと禁じられた結婚」と副題のついた章で近親相姦の問題として考察されている¹³。また、マーク・スピルカもその一人で、註のなかでこう述べている。「ディケンズが自分自身を祖父として、つまりネルの愛の対象だが内心やましい気持ちを抱いた伴侶として見ていることは、ここでは重要な点である。意識的な面では、もちろんトレントはディケンズの父親である。父親の実生活における浪費は、ここでは賭博に置き換えられている。しかし、賭博が性欲を表す無意識的な面では、ディケンズ自身が祖父となり、事実上のネルであるメアリ・ホガスに対する自分自身の欲望を告発するのである。こうした意味で、老人はディケンズの罪の意識の消極面を表しており、その一方でクウィルプは欲望の積極的な投影となっている」¹⁴。メアリ・ホガスとは、言うまでもなく、ネルのモデルとなったと一般にいわれている若くして死んだディケンズの義妹であり¹⁵、「賭博が性欲を表す」とはフロイトの有名なドストエフスキー論「ドストエフスキーと父親殺し」を念頭においた言葉である。

こうしたフロイト流の解釈にしたがうと、骨董品に囲まれたネルの情景は祖父の性欲にさらされた孫娘というグロテスクな場面として浮かび上がってくる。骨董屋の主人である老人と骨董品との関係は、先のロマーノのように分析すれば、換喩的な関係にあり、骨董品は老人の分身的な存在と解することができる。そうした骨董品のなかに孫娘のネルを一人残して夜な夜な賭博に出かけていく老人の姿は、己れの性欲をネルに直接行使することができずにその代償行為にのめり込んでいくことによって¹⁶、ベッドで眠るネルに対しては欲望の抜け殻とならなければならないことを示していよう。ネルを取り囲む骨董品には、現在から置き去りにされた物という意味で、現在の欲望の抜け殻という意味合いがある。老人はネルの祖父という形骸をあとに残して、欲望のかたまりとなって夜の街へ賭博に出かけていく。夜中の骨董屋で一人骨董品に囲まれて眠るネルの情景のアレゴリーとは、この場合、こういったものになるだろう。そしてこの情景がグロテスクなのは、こうした観

点からみると、骨董品自体がグロテスクであるためというよりは、むしろ骨董品とネルとの関係がグロテスクだからといえる。つまり、骨董品が老人の欲望の抜け殻であるとはいえず欲望の抜け殻であることによって、骨董品に囲まれたネルの情景の背後には老人の欲望が影のように潜伏している。つまりこの情景は、祖父と孫娘という父と娘よりもいっそう無償で無・性的なものだと考えられている愛情関係のうちに、利己的で性的なものが介入していることをアレゴリックに示している情景ということになる。いわば、それまで正常な世界の秩序が成り立っていたかに見えるところに亀裂がはしり、異常な世界の深淵が顔をのぞかせている場面ともいえよう。グロテスクとは本来、そうした関係性の崩壊から生じるものである。カイザーも「グロテスクなものの構成は、われわれの世界定位のための諸範疇が役に立たないことを必要条件とする」¹⁷と述べているように、グロテスクには、少なくとも近代以降のグロテスクには、そうした秩序破壊的なところがある。

フロイト流に暴力を性的なものに限定して考えれば、以上のようになるだろうが、暴力は性的なものに限るわけではない。「性的」ということを広く解釈すれば、確かに暴力の多くは性的なものとなるだろう。しかし、あまり普遍化すると「性的」ということの実質が薄れてくるし、説得力にも欠けてくるように思える。例えば、右で見たようなフロイト流の解釈を可能にしている 賭博 = 自慰行為 という概念などがそうだ。確かにそうした解釈も可能ではあるが、賭博は何よりも貨幣の問題であり時間の問題でもあることをすっかり捨象してしまっている。物事を概念化するには捨象は不可避的なことであるとはいえ、物事の実際を無視してまで概念を押し通すべきではないだろう。こうなると趣味の問題かもしれないが、賭博が性の問題か貨幣の問題か、そのどちらかと訊かれれば貨幣の問題だろう。いや、貨幣も肛門愛の問題だから結局は性の問題だ、というかもしれない。しかし、貨幣の肛門愛説も貨幣の問題を性的な次元に限定してしまうことでしかなく、貨幣の問題をそれこそ尻すばみに終わらせてしまうだけではないだろうか¹⁸。

だからここでは、賭博はあくまでも貨幣の問題として、しかも時間と深くかかわった貨幣の問題として考えたい。というのも、老人が賭博をはじめたきっかけには、先の老人の言葉からもうかがえるように、時間が深くかかわっているからである。つまり、余生の短くなった老人が余生という己れの時間の有限性に抗してまで蓄えつまり貨幣を蓄積しようとしてとった手段が賭博であり、その目的は孫娘のネルの将来のためということになっている。この目的と手段との関係は老人がいうほど厳然としたものではなく、実際途中でその関係は明らかに逆転してしまうのだが、いずれにしろ時間が不可欠な要素として関与していることではかわりがない。さらにいえば、この小説には時間の問題が暴力の問題と緊密にからみあった形で遍在しており、死の問題においてそのことは端的に見てとることができる。なぜなら死とは、個体にとっての時間の終わりを意味し、個体にふるわれる暴力のなかでも最も徹底的な暴力といえるからである。

寿命という点からいえば、死とは個体にふるわれる時間の暴力ともいえよう。老人は余生の短さを意識することによってこの時間の暴力にさらされた存在といえる。いや、そん

なことをいえば、人は誰しもこの世に生を受けて以来時間の暴力にさらされているといえるだろう。生まれたばかりの赤ん坊でさえ、寿命を刻々と減らしているという意味では、老人とかわらない存在といえる。しかし、それを暴力として捉えるには人間の意識化が必要となる。しかも暴力として身に迫ってくることを実感するには、抽象的な観念として死をただ知っているだけでは足りないだろう。「死の深刻さを自覚すること、それはまず抽象的で観念的な知識から実際の出来事へと転調することだ。ところで実感する^{レアリゼ}というではないか。実感するとは、逆説的なことだが、真理から遠ざかり、合理的ではありながら納得はさせない明証性から、不透明だが自身で生きた明証性に移ることだ。たとえば、観念的で名目的な可能性としてしか知らなかった光景を自分の目で見ると」¹⁹。老人はこれを老化という形で垣間見ているといえる。肉体に生じる老化の様々な現象は、時間がふるう暴力の痕跡といえるものである。例えば、顔に生じたしわの一本でさえ死に近づいていることの目に見える光景の一つといえる。「ある朝、それまでぼんやり眺めていた自分の顔のしわに気づき、その前駆的象徴を心配そうに眺めて思いこむ。しわのよった自分の顔を、あたかもまだ見たことがなかったかのように、今日はじめてそれを見るかのように、沈黙の内に見つめる。そして、たしかに、ある意味では、はじめて真理を発見するのだ。人びとが前々から発見していたことを、自分自身でふたたび発見する、そうだ、世界が世界であって以来、年老いてゆく人びとは、いつの日にか、鏡の前でこのまったく予期されていてしかるべきことを発見するのだ。そして、さらにひどいことには、それにいつも驚かされるのだ。(中略) 死の抽象的な概念が、突如、人に現実の出来事として現われる」²⁰。

したがって、『骨董屋』において誰よりも時間の暴力に自覚的なのは老人であるといえる。しかも老人は、このような暴力を秘めた時間に依存して生活している。つまり老人は骨董屋を経営しているわけだが、そうした点からいっても老人と時間とは緊密な関係にある。骨董品とはいわば、時間の経過にともなって崩壊していく物のなかで、時間のふるう暴力にたえて残存することによって稀少性を獲得し、それによって価値を帯びるにいたった物だといえよう。その意味で、時間のふるう暴力は価値を生み出す原動力となっている。時間のもつこうした二面性、物を破壊すると同時に価値を生み出すという二面性を、骨董屋の主人であるこの老人は身をもって生きている。その意味でこの老人は、時間にどっぷりと浸った人物だといえる。というより、時間の二面性のそれぞれに片脚ずつ突っ込んで時間の二面性を積極的に生きている人物といえようか。とにかく、この小説と時間の問題とは切り離せない関係にあることはまちがいない。そもそも『骨董屋』という作品は「時間そのものの真只中」²¹にあったのだ。『骨董屋』は当初ハンフリー親方が仲間うちで読んで聞かせる物語の一つであったのであり、その原稿を彼は大時計のなかにしまっていた。つまり「時間そのものの真只中」にしまっていたというわけだが、この言葉もあながち無意味な言葉ではないかもしれない²²。しかしここではハンフリー親方のことは無視してかまわない。途中からハンフリー親方の一人称の視点は作者ディケンズによる三人称の視点に入れかわるのだし、ここでは『骨董屋』という独立した物語の時間を問題にしているの

だから。

6

老人は時間の二面性を生きているといったが、その一面である老人自身の「余生」としての時間は、ハイデガー流にいうならば、死への存在のうちを流れる実存的な時間といいなおすことができる。それは「最も自己的な、他と無関係であって追い越すことができない」²³ 時間だ。なぜなら、死は他人が代理することのできない自己に本来の「可能性」だからである。「現存在の 終ってゆくこと を形成し、現存在それ自身にさまざまな全体を与えている存在可能性の代理が問題となるばあいには、右の代理可能性は巧くないのです。だれも他人から、かれの死ぬことを取りのぞくことはできません」²⁴。しかし、人はこの自己の死の確実性を直視し続けることはできない。それは日常性からの超出を意味し、日常的な次元で存在せざるをえない人は、日常的なもののなかに「転落」²⁵ していくほかない。言い換えれば、己れの死へ向けられた視線はそこから屈折していくか、あるいは死と視線とのあいだに何かを介在させざるをえない。「太陽の燦々たる光が、われわれの目には、その耐えがたい輝きを緩和するくもりガラスの使用を必要とするように、死の暗黒は弁論の仲介という幕を通してのみ思弁の対象となるのだ」²⁶。この「くもりガラス」を日常性ととってもよいだろう。そして、この日常性において人は己れの死への視線を屈折させるのであり、老人の場合、ネルの将来への気づかいという形でそれはおこなわれる。日常的な次元でおこなわれるこうした気づかい＝「配慮」は、死の脅威にさらされた老人の実存的な不安を「分散〔気散じ〕」させるだろう²⁷。つまり、まだまだ長い人生をひかえた孫娘のネルの将来のために、老人は貨幣を蓄積しなければならないという積極的な意欲をもやすのである。

ところで、ジンメルは『貨幣の哲学』において、「目的に導かれた意欲」と「衝動的な意欲」とを区別している。つまり、「われわれの行動がただ（より狭い意味において）因果的にのみ規定されるやいなや、全経過は、衝動的なエネルギーが主体的な運動へ変わることによって終結し、緊張の感情、駆り立てられているといった感情は、行為が衝動の結果として現われるやいなや取り除かれる。衝動は、それにとって自然な運動への移行によって完全に生きつくすのであり、したがって主体の内部における全経過は閉ざされたままである」のに対して、「目的の意識によって導かれた過程は、それとはまったく異なった経過をたどる。この過程は最初は行為の一定の客観的結果をめざし、その結果の主体に対する反作用、あるいは主体のその結果に対する反作用によって終結する。それゆえ目的行動の原理的意義は、それが主体と客体とのあいだにつくり出した相互作用にある。われわれの生存というたんなる事実が、すでにわれわれをこの相互作用のなかに織り込むことによって規定された行動を精神の内面性へと高める」²⁸。要するに「衝動的な意欲」は一過性のものであるのに対して、「目的に導かれた意欲」は目的設定という「距離」の創出によって

"持続"を生み出すということができる。「行動を精神の内面性へと高める」とは、行動を"持続"（「生きられる持続」²⁹といってもよい）の層のもとにおくといい直せよう。

それでは、老人の抱く意欲はどちらに属するのだろうか。老人の意欲の原点には死があるが、死に対する「衝動的な意欲」といえば自殺しかない。しかし、老人は自殺はしない。それでは「目的に導かれた意欲」だろうか。一見そう見えるが、これでもない。なぜなら、死は「目的」とはなりえないからだ。というのも、「目的」とは対象の対象化であり、死はそもそも対象化しえないものなのだから。「まったく認識論的グノセオロジックな意味ではなく、死は文字どおりに、思惟の先験的ア・プリオリ与件だ。つまり、思惟はつねに死に先を越される。いかなる瞬間に死を考えようと企てるにせよ、死という先験的与件は、不透明で測り知れない包括的なものとしてすでにそこにある。思惟が死を一つの対象としようと企てて、力を入れ直してもむただ」³⁰。右で目的設定は"距離"の創出によって"持続"を生み出すとあったが、"持続"をここでは"遅延化"といいかえてもよい。というのも、「『目的』とは、遅延化(差異化)によってもたらされる転倒なのだ」³¹から。そして死は「遅延化(差異化)」できないものであり、そんなことを企てても「思惟はつねに死に先を越される」ほかないだろう。よって老人の意欲は、ジンメルゲオルク・ジンメルの区別する意欲のどちらでもないことになる。

となると、ジンメルゲオルク・ジンメルの意欲の二分法は無意味なものなのか。そんなことはない。生の哲学者であるジンメルゲオルク・ジンメルはそれを生の次元にかぎって考察しているのであり³²、生の次元（ここでは日常性の次元といった方がいいが）でいえば、老人はネルの将来のためという「目的に導かれた意欲」をもやすことになる。しかし、そうしてしまうと、死の問題つまり時間の暴力の問題が隠蔽されてしまう。だから、老人はいわば「目的に導かれた意欲」と「衝動的な意欲」の境界線あるいは分水嶺において意欲をもやしているといえよう。あるいはさらに、合理性と非合理性のあいだでそうしているともいえる。老人が「善悪に色分けされた視線で眺めても捉えきれない人物」だと最初の方でいったのは、こうした意味においてである。そしてこういった「目的」を「目的」としえないままに「目的」を求める老人の、その腰味な「目的」を実現するための「手段」となりうるのは「貨幣」においてほかにはない。なぜなら貨幣は、具体的な「目的」のもつ個別性にかかわりなく、どんな「目的」の「手段」ともなりうる絶対的な「手段」だからである。ジンメルもそこに貨幣の「意義」を見出している。「すなわち手段は、人間的意志のすべての偉大さと、しかし同時にそれを制限する形式をも示し、あるいはまたそれらを含んでもいる。目的を、それとのあいだに置かれた中間系列だけわれわれから彼方へ押しやられねばならないという実際上の必要が、おそらくは未来というすべての表象をはじめてひき起こし 記憶の能力が過去をひき起こすのと同じように、そしてそれとともに人間の生活感情に、過去と未来とのあいだの分水嶺に立つという形式と、生活感情の拡大と制限とをあたえるのである。しかし貨幣において手段は、そのもっとも純粋な現実性を得たのであり、貨幣は、手段という抽象的概念とぴったり一致するような具体的な手段なのである。すなわち貨幣は手段そのものである。そして、そのようなものとして貨幣は、人間の意志内容に対する人間 い

くらか逆説的に簡約すれば、間接的な存在と呼ぶことのできる の実践的地位を、つまりは意志内容に対する彼の力と無力とを具体化し、尖鋭化し、昇華しており、この点に生の根本動機の理解にとっての貨幣の巨大な意義が横たわっている」³³。

以上が「手段」としてみた場合の貨幣の性質であるが、ひるがえって死のことを考えてみると、老人は死という目的たりえない目的に導かれてというよりは促されて意欲をもやすわけだが、目的として措定しえない死とは、貨幣が目的の個別性に左右されない絶対的な手段であるのと同様に、絶対的な目的であるといえるかもしれない。つまり、死は目的として措定しえないけれども(あるいは、ゆえに)屈折した形で日常的な次元において意欲を生じさせるものであり、その意欲を行使する手段は「死そのもの」(とは本来いえないが)以外のものではなんでもかまわない(たとえ「死」の研究であろうとも、それは「死そのもの」ではない)。というより、死は日常的な次元での意欲に多かれ少なかれ常によりそっているといった方がいいかもしれない。卑近な例でいえば、意欲のむかう対象(目的)に対して「何々のためなら死んでもいい」といった矛盾した言い回しにそれは端的に見てとれるだろう。死は人生の終わりという意味で真正なる終局であると同時に、どんな目的の背後にもそれを上回る(無化してしまう)形で身を潜めているという意味で最終目的ともいえるものである³⁴。だから、老人が目的たりえない目的でありながらすべての目的に影のようによりそっている死に促されて意欲する対象(目的)が、目的の個別性を超越した(ということは、明確な目的が不在でもかまわないということだ)絶対的な手段である貨幣であることは当然といえば当然であるかもしれない。

しかしここで重要なのは、老人の行為に潜む一種の必然性ということではない。それよりも貨幣の問題が死の問題に従属することなく対峙していることこそが重要である。それは貨幣の問題が死の問題と同様に「根源的な」問題であることを予感させる。死がわれわれの行為の目的に影のようにつきまとう実体のない潜勢力として作用しているのと同様に、貨幣はわれわれの行為のどんな手段にもとって代わりうる可能性としていかなる手段にも潜在しているといえる。死も貨幣も、それぞれ具体的な目的と手段とを超越している点では、似たところがある。そして、死も貨幣もそうした超越性=外部性を実際面では隠蔽している。死についてのそうした事情はすでに述べた。つまり、死のそうした超越性=外部性は人が日常性のなかへ「転落」することで隠蔽されるわけだが、貨幣にも似たような構造がある。すなわち、貨幣は商品と商品の「等価交換」を支える「第三項」として「排除」されることによって商品に潜在している「貨幣」を隠蔽している³⁵。別のいい方をすれば、商品が一定の価格をもつ使用価値として流過程に入るためには、「商品価値の商品体から金体への飛躍」つまり商品の「命がけの飛躍」が必要となる³⁶。この辺の事情を詳しく論じると煩瑣になるのでやめておくが³⁷、いずれにしる貨幣は、商品関係に影のようにつきまとう実体のない潜勢力として作用している点で、死と極めて似ている。そしてこの商品関係というものは、単に商品という物の関係ではなく、人間の関係でもあるのだ。「商品関係は、マルクスがくりかえし指摘しているように、単なる物的関係ではなく、本質的に

人間の社会関係であるという事態の生々しさは、暴力論的視点においては、ますます明確になって来るだろう」³⁸。こうした視点から、老人とネルの関係を次に見ていくことにしよう。

7

それにしても、老人はどうして孫娘のネルの将来のことをあんなにも心配するのだろうか。老人の場合、ネルは実質的には孫というよりは子であるが、どうして人は自分の子や孫の将来のことをあんなにも気にかけるのだろうか。こんなことをいったら、なんと非人間的な、といわれるかもしれないが、それにしても不思議だ。いや、誤解されないようにもっと正確に言えば、どうして人は遺産という形で自分の子や孫に財産を残そうとするのだろうか。子や孫に苦勞をさせたくないという気持ちはわかるが、その結果残される遺産はときには必要以上である場合もある。その「必要」は決めがたいものだし、多いに越したことはないというわけでそうになってしまうのかもしれないが、逆にいうと、自分の必要を減らしてまでそうしようとする場合もあるのは一体どういうわけなのだろうか。ここに自己増殖する資本のからくりを見てとることもできるが³⁹、からくりはわかってその理由がわからない。いや、先に示したように「死」という問題から説明できることかもしれないが、しかし「死」という超越性＝外部性から説明できるとしても、「死」自体が説明のできないものなのだから、最終的には説明のつかない部分が残る。同様に、「貨幣」という超越性＝外部性からも説明することはできるが⁴⁰、「貨幣」も実体のない説明できない部分を残すので、説明しつくせないという意味では「死」の場合と同じだ。何をいつているのだろうか。そんなことは言語の問題からいっても当然だ。当然だが、しかし当然だといってすましていくわけにもいかない。そこに「神秘主義」とはちがう「神秘」があるのだろうか⁴¹、そんな「神秘」をネルの将来を思う老人を見ていると感じてしまう。

とにかく老人は、ネルの将来を案じて身もほそる思いをしている。では実際老人は、ネルの将来がどのようなことを望んでいるのだろうか。ハンフリー親方が別の機会に骨董屋を訪れたとき、老人がネルに聞かれぬようにこっそり語って聞かせる言葉に、それは漠然とながら示されている。

「ちょっと一言、お耳を拝借」と老人は急き込んだ囁き声でいった。「この間の晩あなたの言葉を聞いてからというもの、わしはずっと不安な気持ちでおりました。わしにいえることといえば、わしはすべて良かれと思ってやってきたということ、もし可能だとしても（不可能ですが）取り消すにはもうおそすぎること、そしてわしにはまだ勝つ見込みがあるということです。すべてあの娘のためなんです。わし自身はひどい貧乏をなめてきましたが、貧乏のもたらす苦難をあの娘には免じてやりたいんです。わし自身の愛しい子供だったあの娘の母親を若いうちに墓に連れ込んでしまった貧乏を、あ

の娘には免じてやりたいんです。わしがあの娘に残してやりたいのは、簡単に使い果されたり浪費しつくされるような資産ではなく、永遠にあの娘を貧困の手の届かないところにおいてくれるものなんです。いいですか、あなた。わずかのあてがい扶持ではなく、大身代なんです　しっ！　いまは、いや別のときでも、これ以上はいえませんが、あの娘がまたやってきました！」(第三章、七一頁)

ネルにとって「大身代」は果して必要なのだろうか。いや、そんなことはネルには関係ないだろう。遺産というものは、本来その相続人の思惑を越えたところで蓄積される。遺産の相続人は、そうした意味では、単なる「名目」にしかすぎないとさえいえる。遺産には人と人との関係が不可能な時点(つまり一方の死)における「代理」という役割があるが、それは生きている時点における人と人との関係にも影響をおよぼさずにはいない。いや、順序は逆かもしれないが、いずれにしろ、そこには「倒錯」が働いている。つまり他者への配慮、しかも自分が死んでいるのだから他者として対することのできない他者への配慮、この時空を越えた他者への配慮は、呪物崇拜つまりフェティシズムの形で貨幣において結晶化せざるをえないだろう。これは遺産にかぎらず蓄積全般についてもいえることである。つまり、「こうして、蓄積そのものが、貨幣フェティシズムによって生じるといってよい。貨幣を蓄積すれば、ものをいつでも獲得できるのだから、ものをわざわざ蓄積する必要はない。つまり、蓄積は、貨幣の蓄積としてのみはじまる。それは、もの(使用価値)を蓄積することには、技術的に限界があるからではない。そもそも、貨幣経済の圏外にある、どんな「共同体」においても、「自己目的」的な蓄積への衝動などありえないのである。逆に、そこでは、余剰生産物^{とうじん}は蕩尽されてしまう。それは、『蓄積』になれ、且つ「合理的」な思考になれたわれわれを驚かせる。しかし、驚くべきなのは、『蓄積』の非合理性の方である。それは、必要や欲望にもとづくどころか、それらにまったく反した「倒錯」に根ざしている。逆に、『蓄積』こそ、われわれに、必要以上の必要、多様な欲望を与えるのである」⁴²。

老人は「すべてあの娘のため」というけれども、その言葉には当のネルは不在である。それはネルが不在であるからこそいえる言葉なのだ。最後にネルがやってきて話をやめてしまうところに、それは如実に表れている。老人の思いは当のネルを越えたところにあり、その思いのなせる「蓄積」は「永遠にあの娘を貧困の手の届かないところにおいてくれるもの」でなければならない。これを「必要以上の必要」といわずに何といたらよいだろう。永遠の相においては、ネルの必要も欲望も関係がなく、そのためネルは非実体化されてしまっている。老人の貨幣フェティシズムは明白である。

ところで、「遺産」はディケンズの小説にとって中心的なテーマの一つである。『大いなる遺産』にかぎらず、それは他の多くの小説にもいろいろな形で姿を現わしている。「遺産」とまではいわなくとも、人と人との関係が貨幣によって動かされているという意味では、ディケンズの小説はどれをとっても貨幣にもとづいた小説だといえる。それは世界経済に

君臨していたヴィクトリア朝イギリスの、しかもその経済の中心地たるロンドンを主な舞台にしていることから、当然の成り行きといえはいるかもしれない。しかし、だからといってディケンズの場合のように、貨幣の問題が単に挿話的な問題ではなく主要な問題になるとはかぎらない。それにはディケンズの属する階級が影響していたのかもしれない。イーグルトンによれば、一九世紀リアリズムの最大の成果はサッカーやトロロウブやディズレイリやブルワー・リットンの作品ではなく、ブロンテ姉妹やディケンズやジョージ・エリオットやハーディなどの作品であるとし、その原因を後者の作家群が属していた「プチ・ブルジョワジー」という階級にあるとしている。しかも社会におけるその「あやふやな位置」にその神髄を見出している。つまり、「社会体制の中であやふやな位置を占めていたために、プチ・ブルジョワジーの作家は一つの階級に悠然と留まった作家に較べ概して視野が広く、豊かで重要な経験を包摂することができ、それ故、ブルジョワ社会のもつ典型的な矛盾を自らの状況に見出し得た、と言えよう」⁴³。しかし、もっと正確に言えば、「あやふやな位置」とは実体のない貨幣を社会において最も頼りにしている立場といい直した方がよいし、「視野が広」かったというよりも、その「視野」が「ブルジョワ社会のもつ典型的な矛盾」つまり貨幣にもとづいた社会に潜む「倒錯」に向けられていたといったほうがよい。そしてディケンズは、その「典型的な矛盾」ないしは「倒錯」を「遺産」に見出していたといえるだろう（ただし前期の小説においては、そのように意識していたわけではないが）。

その点を捉えて、チュスタトンが面白いことをいっている。「根拠はないながらも明白なことなので多くの者が気づいているにちがいないことだが、ある作家の作品のうちの一つの題名がうまい具合に彼の全作品を全般的に説明する言葉になっている場合がしばしば見受けられる。例えば、スペンサーの全作品は『天上の美への讃歌』（*A Hymn to Heavenly Beauty*）と呼べるだろうし、あるいはバーナード・ショー氏のすべての装丁本は『あなたさまにはわかりませんよ』（*You Never Can Tell*）と呼べるだろう。同様に、サッカーの本質と精神のすべては『虚栄の市』という総括的な題名のもとに集約されるだろう。また同様に、ディケンズの本質と精神のすべては『大いなる遺産』という総括的な題名のもとに集約されるだろう」⁴⁴。『骨董屋』においてはまさにその通りである。この小説を『大いなる遺産』と名づけても決しておかしくないほどだ。とくに孫娘のために「大身代」を夢見る老人がまだ前面に出ているあたりは、それこそ「大いなる遺産」の名にふさわしい。骨董屋を借金の抵当にとられたあげく、老人とネルが夜逃げ同然に（実際は早朝だが）ロンドンを抜け出して放浪の旅に出てからの場面でさえ、「大身代」の夢破れての傷心の旅という意味では「大いなる遺産」は影のようについてまわっている。その点「骨董屋」そのものはロンドンを出てしまっただけからではなく、どんどん印象が薄れていってしまい⁴⁵、「大いなる遺産」の方がむしろこの小説の題名としてはふさわしいくらいである。

とにかく、老人は「大身代」をつくるどころか破産してしまう。それによって老人は「蓄積」という「倒錯」あるいは「病い」から一時的に抜け出すことになる。それは、借金を

賭博につき込んでいる事実をクウィルプにつかまれて見放されたあと、老人が発作をおこして病いの床に倒れてしまい、しばらくしてその病いから回復していくことで象徴的に描かれている。

ようやく老人の病いは峠を越し、老人は快方に向かいはじめた。非常にゆっくりと弱々しい足取りで彼の意識はもどってきたが、精神は衰弱しその機能はそこなわれていた。彼は忍耐強く、そしてもの静かだった。長い時間もの思いに沈んで坐っていることがよくあったが、落胆した様子でもなかった。壁や天井に映る陽の光にさえすぐに喜び、昼が長いとか夜が退屈だといって不平をこぼすこともなく、そしていっさいの時間の観念と心配や退屈のあらゆる感覚を実際に失ってしまっているように見えた。彼はネルの小さな手をとってその指をいじったり、ときどきその手をとめて彼女の髪をなでたり額にキスをしたりしながら、何時間でも通して坐りつづけたものだった。そして涙が彼女の目にきらきらと輝いているのを見ると、驚いてその原因は何かとあたりをながめまわし、まさにそうしてながめまわしているあいだに自分の驚いたことを忘れていた。(第一章、一四四 五頁)

老人は一種の「痴呆症」を呈しているともいえるが、それをなんと呼ぶにしろ、蓄積の倒錯によって「永遠」に向けられていた視線を老人が「現在」に向けなおしはじめたことを右の引用は示しているだろう。永遠の相のもとにいわば追いやっていたネルとも、老人は「現在」において出会いなおすのである。それは右の引用からもうかがえることだが、以前はまじめに受けとろうともしなかったネルの言葉に老人が同意を示すところにそれは最もよく表れている。つまり、賭博による借金の返済に苦慮する老人に向かってネルが「乞食になって、幸福になりましょう」(第九章、一二二頁)というのに対して、老人は「乞食そして幸福！(中略)かわいそうに！」(同)と嘆くばかりだったのだが、病いから回復してしばらくすると、老人はこの態度を改めてネルのいったことに従おうとするのだ。そして二人は放浪の旅へ出るわけだが、そのまえにネルが老人に訴えていた言葉を見ておこう。

「乞食になりましょう」その子は老人の首に片腕をまわしながらいった。「十分なものがえられるにちがいないわ、きっとよ。田舎を歩きまわり、野原や木々の下で眠り、お金やおじいちゃんを悲しませるどんなことも考えずに、夜は休み、昼は太陽と風を顔に受け、そして神様にいっしょに感謝しましょう。もう二度と暗い部屋や憂鬱な家のなかに足を踏み入れたりせず、どこでも好きなところへあちこちさまよっていき、そしておじいちゃんが疲れたときには一番快適な場所を見つけて休んでもらい、私は二人のために物乞いをしにいくわ」(第九章、一二二 四頁)

まあ、老人でなくとも「かわいそうに！」と叫びたいくなる楽観ぶりだが、楽観ということでは、賭博で「大身代」を築こうとする老人も五十歩百歩で人のことはいえない。しかし、その楽観の構成の仕方では老人とネルはまるでちがっている。簡単にいえば、その日常性と非日常性がひっくり返っている。つまり、「賭博は、日常性から発して非日常的な世界に遊び、再び日常性に回帰するが、非日常の異様な状況での負債が、日常性に戻ったあとでも付随してまわるといえる結果になる」⁴⁶ものだとすれば、乞食においてはそれが逆転していると考えられる。どういうことかということ、ある種の労働をおこなって賃金を得ることを一般人の日常とすれば、乞食は一般人にとっての非日常を日常とし、生活の糧を得るといえる日常的な行為にもその非日常性をもちこんでくるということである。つまり、働いて賃金を得ることをせずに貧しい状態に甘んじていること自体が人々の憐憫をさそい、その憐憫によってなんらかの生活の糧がもたらされる結果となる、ということだ。乞食になるというネルに対して老人が「かわいそうに！」(“Poor child!”)という言葉に、それは暗示されているといえるかもしれない。「貧しい」ということは「かわいそう」なことなのである。

そうした意味で、ネルは自分の「商品価値」をよくわきまえているといえるかもしれない。いや、ディケンズがネルの「商品価値」をよくわきまえている、といった方が正確だろう⁴⁷。いずれにしても、ネルの可憐さはその貧しさによってさらに引き立つことになる。そこには、赤頭巾の場合と同様に、暴力的な状況が関与していることはいうまでもない。放浪の旅にでてから出会う人々がネルに好意を示すのは、意識するにしろしないにしろ、どこかでそうした暴力性を嗅ぎつけているからだといえる。ネルは、その意味で、暴力に養われているとさえいえよう。そして、旅で出会う人々のなかから、ネルのそうした存在に「商品価値」を見出す者が現われても不思議ではない。旅回りで蠟人形の展示をおこなっているジャーリー夫人がまさにそれだが、彼女はネルが格好の客寄せになることを見抜くのである。

疑いもなく、ジャーリー夫人は発明の才に恵まれていた。展示会に客を引き寄せる様々な工夫のなかに、小さなネルを加えることを忘れなかった。(中略)その子の美しさは、おとなしくおずおずした態度と相まって、その小さな田舎町に一大センセーションを巻き起こした。(第二十九章、二八六頁)

「おとなしくおずおずした態度」の人間に対したとき、われわれは暴力が刺激されるのを感じないだろうか。ましてやそれが「美しい」少女である場合には、なおさらではないだろうか。たとえそれが守ってあげたいという気持ちとなって表れるにしても、そこには「暴力から」ということが前提とされているだろう。われわれの抱くいたわりの情を偽善だとはいわないが、そこには暴力が介在していることをわれわれはしっかりと認識しておくべきである。

とにかく、ネルはこのようにしてその「商品価値」を発揮するわけである。人間の社会関係が本質的に商品関係であることについてはすでに述べたが、ネルもそうした関係のなかで生きていくほかない。そのことは、放浪の旅にまだ出ずに、骨董屋で骨董品に囲まれて生活している場面にも、すでに可能性として見てとることができる。なぜなら、骨董品もまた商品であることには変わりがないからである。

8

老人と二人きりで骨董屋で暮らすネルは外の社会とはほとんど関係をもたないが、そんなネルも骨董品という商品に取り囲まれる形で人間の社会関係つまり商品関係のなかに身をおいているといえる。ただし骨董品の場合、商品としての生々しさは薄れてしまっているといえるだろう。つまり、骨董品はその多くが人の手にわたることによって商品であることを一度はやめているわけだから。言い換えれば、「あらゆる商品は、その流通への最初の一步、すなわちその最初の形態変化で、流通から脱落する」⁴⁸のであるから。そして骨董品とは、一度流通から脱落して商品であることをやめた物を再び流過程にのせるべく強引に商品関係のもとに引っ張り出された物といえるだろう。だから骨董品は、商品としての生々しさ（あるいは労働生産物としての生々しさ）を失っているかわりに、かえって商品関係の生々しさを際立たせているといえる。というのは、一見使用価値がないように見える物にもなんらかの価値を見出さずにはおかない商品関係の徹底した力あるいは暴力が、そこには歴然としているからである。

そして、この商品関係の暴力をつきつめれば、それは貨幣の暴力となるだろう。マルクスも右の引用に続いてこう述べている。「これに反して〔商品が流通に入ると同時に流通から脱落するのに反して 引用者註〕、貨幣は、流通手段としては、たえず流通部に棲息していて、たえずここで働きまわっている」⁴⁹。すなわち貨幣は、商品関係の動態である商品流通の駆動力となっているといえるだろう。物々交換でさえ、そこに貨幣が前提となっていなければ生じえない。なぜなら、物と物とを等価と見なすことのうちには一般的等価形態たる貨幣形態が潜在しているからである⁵⁰。そして、こうした商品関係の暴力たる貨幣の暴力を逆に際立たせている骨董品に取り囲まれたネルは、貨幣の暴力のアレゴリーのなかに存在しているといえるだろう。しかも、貨幣の暴力を通して見た場合、骨董品もネルも「流通部に棲息していて、たえずここで働きまわっている」貨幣に捉えられる可能性を共有している点で似ている。ただしその「流通経路」はちがうわけだが、貨幣の暴力にさらされて「商品」としての「命がけの飛躍」をおこなわざるをえなくなる点においても両者は共通している。

こうして見てくると、骨董品とネルとが実によく似た存在であるように思えてくる。骨董品は通常の商品とちがってその古さによって価値をもつが、それと同様に乞食になろうというネルは労働という通常の手段をとらずに貧しさという恵まれない境遇を逆手にとっ

て恵みをえようとする。その逆説的な姿勢の点でも両者はよく似ている。さらにいえば、人の善意にすがって生きることを夢想するネルはそれ自体骨董品的といえる。それはまさに反時代的な態度といえるだろう。その点、ガレット・スチュアートの次の言葉は的を射ている。「ネルは、ポスト・ロマン派の労働倫理、つまり活力と目的という国全体の道徳の大胆不敵な逆転である」⁵¹。当時のヴィクトリア朝イギリスは「世界の工場」として邁進中だった。人の善意も「救貧法」という法律のもとに制度化されることによって実質を失いつつあった。そうした時代の動きに照らしてみると、ネルは確かに骨董品じみて見えてくる。ネルは、「古き良き時代」を精神的に反映した存在として、老人が骨董屋においていたいま一つの「骨董品」といえるかもしれない。ネルの少女としての可憐さは、「生きた骨董品」の逆説を表現しているともいえるべきだろう。

とにかくネルは、老人とともに放浪の旅に出ることによって 骨董屋という隔離された空間から商品関係の暴力が荒々しく渦巻く社会に出ていくことによって その骨董品的な「商品価値」を発揮することになる。しかも普通の商品とちがって、一度「商品価値」を実現することによって「商品」であることをやめることはなく、行く先々で人々の好意を受けることになる。その意味でネルは、むしろ貨幣に似ている。ネルは一つの価値形態といえよう。価値形態とは価値そのものではない。また、その価値だが、価値には何か実体があるわけではない。「価値は、“純粹意識”と同様に、はじめからあるのではない。だが、対象物からそれが生じるのでもない。それはただ関係（差異）にのみ根拠をもつ。差異は、意味でもなければ物質でもない。逆に、根源的な差異化が、意味や対象物を派生させるのである」⁵²。一般的等価物たる貨幣が現われる状況を説明したこの文章は、人間的な価値についても通用する。人間的な価値と貨幣的な価値は分けて考えるべきだとする向きもあるかもしれないが、それは物事の隠蔽でしかない。また、人間的な価値がまずあって、そこに貨幣的な価値が付け加わるというわけでもない。むしろ逆である。「たとえば、貨幣経済において人間と人間の関係が物と物の関係としてあらわれるというとき、まるで人間と人間の関係という直接性・透明性がはじめから存在するかのように考えられているからである。実際は、貨幣経済が人間と人間を関係づけるにすぎない」⁵³。これは通俗的な「物象化」の考え方を批判したものだが、人間と物とを区別する考え方にこそむしろ「物象化」は潜んでいる。つまり、人間の社会関係もまた商品関係であるという事実を隠蔽することこそが「物象化」なのだといえる。

ネルに価値そのものを見出すことも一つの「物象化」といえよう。多くの論者がそうした誤りを犯している。例えばイーグルトンなども『骨董屋』のネルは、金が物を言う都会において失われてしまった自然の価値を象徴する⁵⁴と、われわれの視点からすれば、少々不用意なことをいっている。ほかにもあげれば切りがないが、そんななかで、ネルの「価値」が関係性にもとづいたものであることを示唆する言葉もある。マイケル・スティーグは、ネルが老人の理想化の犠牲者であると捉えている。「まったく文字通りの意味で、彼〔老人〕によるネルの理想化は彼女の衰弱の原因となっているといえるかもしれない」⁵⁵。ここ

での論点とは多少ずれているけれども、ネルが他者との関係において「理想」なり「価値」なりを体現していることを捉えた文章だとはいえる。また、マーク・スピルカによるネルの規定の仕方にもそれがかすかにうかがえる。「人間的な価値の試金石である小さなネルは、四方を貧困と産業による荒廃に取り囲まれ、〔老人の〕貪欲によって病いにさらされ、最後にはその病いに滅ぼされるのである」⁵⁶。ネルが「人間的な価値の試金石」であるということは、ネル自身が「人間的な価値」を担っているのではなく、ネルとの関係において「人間的な価値」が認識されるということだろう。書き手にこうした意図がたとえないとしても、「試金石」(“touchstone”)にこういった意味合いを読み込むことは可能だ。そして、ネルが「価値」そのものではなく「価値形態」だというのは、そうした関係性を重視したいからである。

つまりネルは、まわりとの関係において、常に暴力の存在を意識させるのである。それは多くの場合「いたわりの情」となって表れるが、それが暴力を前提としたものであることはすでに述べた通りであり、「いたわりの情」とは、言い換えれば、暴力の存在を前意識的に捉えたものだといえよう。その意味でネルは、様々な社会関係の根源に存在している暴力を、程度の差はあれ、まわりの人間に常に思い出させる存在だといえるのである。それは、ネルが様々な社会関係をその根源的な関係において生きることが意味する。ということは、ネルと関係を結ぶ人間もその根源的な関係を生きることでもある。ネルが「人間的な価値の試金石」であるという言葉が意味をもつのは、ネルとの関係において人は暴力を験されるという点においてである。つまり、ネルと関係する者は意識するにしろしないにしろ、根源的な選択のまえに立たされるのである。「人間には、二つの可能性がある。『理性は人間のひとつの可能性である』『もうひとつの可能性は暴力である』この可能性を自由と言い換えてもよい。人間の自由は二つの顔をもつ。理性を選ぶ自由と暴力を選ぶ自由である。二つの自由は切り離されてあるのではなく、人間的自由が理性と暴力の二方向に同時にひっぱられているのである」⁵⁷。したがって「いたわりの情」とは「理性」を選択した結果だといえる。人はその「選択」を意識せずに、それが心底からのものかどうかかもしれない。しかし「底」などどこにもないのだ。あるのは暴力か理性かの選択であって、理性を選択した結果暴力が隠蔽され、その「隠蔽」が「底」のように感じられるのにすぎない。だから理性に絶対的な根拠はないのだ。そして社会関係はこのような危うい選択にかかっている。ネルはその根源的な危うさを思い出させるのだ。社会関係とは暴力と理性との関係にのみ根拠をもつものであり、それは個々の人間の暴力か理性かの選択にかかっている。ネルは個人が社会化するそうした根源的な関係を創出しているといえる。その意味でネルは「価値形態」なのである。ネルと関係する者の多くが示す「いたわりの情」という人間的な価値は、ネルとの関係において暴力と理性という根源的な選択を(意識せずにしろ)おこなった結果生じるといえる。それは商品が貨幣という価値形態を前提としなければ生じえないことと似ている。だからネルは、「生きた骨董品」というよりも「生きた貨幣」⁵⁸といった方が適切だろう。

財産をすべて借金の抵当にとられてしまった老人は、こうした「生きた貨幣」ともいべきネルを伴って放浪の旅へ出かける。「ネルを伴って」というよりも「ネルに連れられて」といった方が、二人の放浪の旅についていうにはふさわしい。保護者 被保護者の関係は旅に出てから逆転する。それは早朝こっそりと骨董屋を抜け出し、街路に立ったときにすでに明らかである。

「どっちへ行くの」とその子はいった。

老人は、決断がつかなく当惑した様子で、まず彼女を見、それから左右を見、再び彼女を見、そして頭をふった。これから先、彼女が彼を案内し導いていくことになるのは明らかだった。その子はそれを感じたが、しかし疑念や不安を抱かずに、自分の手を老人の手にあずけると、老人を連れて静かにそこを去っていった。(第一章、一五〇頁)

これはネルが "自立" した場面ともいえるが、「骨董品」という「商品」としてのネルが流通過程のなかへ「命がけの飛躍」を遂げた場面ともいえる。あるいは、「骨董品」という「一商品」であったネルが「一般的等価物」たる「貨幣」に転身した場面ともいえる。貨幣がもともと他の全商品の交換を可能にする媒介項として「排除」された一商品であるのと同様に、「骨董品」たるネルは他の骨董品の集まっている骨董屋から「排除」されることによって「貨幣」となったといえよう。貨幣が成立するところにはそうした「排除」という「暴力」が働いているのである。「相互性は、相互排除という暴力の互酬性をもって運動するが、この運動は相互性（社会関係の秩序）を存続させるどころか危機へとおいこむ。暴力の互酬性は、ついには第三項を共同的に暴力的に産出することによって、相互性の秩序安定化をはかることになる。コスモスの形成と樹立は、第三項創設をもって一応終結する。経済用語で言い換えれば、商品世界は、貨幣形態（まだ貨幣自体ではない）の産出をもって、ようやく自立する。この意味で、第三項は、コスモス（秩序）の形成と存立にとって不可欠のモメントであり、したがって、商品世界は貨幣形態を不可欠のモメントとする。社会関係は、二項対立関係ではなく、第三項と二項対立関係との関係であることの意味は、十分にとらえておく必要がある」⁵⁹。

この引用にしたがえば、ネルは「貨幣形態」として産出されたといえるが、それによってネル自身が "自立" したというよりも、ネルを「貨幣形態」とする社会関係が "自立" したといえよう。その関係において、老人は「貨幣形態」たるネルに頼らざるをえない。なぜなら、商品世界である近代市民社会が貨幣形態を「第三項」として排除することによってその秩序を維持するように、老人をはじめとしてネルと関係する人間が抱く「いたわりの情」という人間的な価値は、暴力的な状況に追いやられたネルを介することによって、自らに潜む暴力性をその状況に転嫁して心底からの純粋な感情として毒抜きされるからである。ネルの存在がなければ、老人は自らの罪の意識すなわち精神的な負債から逃れることはできないのだ。物質的な負債から逃れる老人は、精神的な負債を隠蔽すべくネルにす

がるのである。「すべてあの娘のためなんです」(第三章、七一頁)と。放浪の旅へと出発する場面に見られる老人とネルとの依存関係の逆転は、実は逆転でもなんでもない。老人ははじめからネルに依存していたのだから。ここに『骨董屋』における暴力に根ざした社会(人間)関係は"自立"するのである。

本論はここで終わる。旅に出てからの話は、暴力という点からいえば事後的なものであり、それについて論じるにはまた別の角度から考察する必要がある。それにこの小説は、註でもふれたように(註47参照) ロンドンの骨董屋をめぐる話としてそもそも完結したところがある。しかもその部分がその後の話に決定的な影響をおよぼしている。その結果、その後のストーリーの展開には不完全な点が多いにしろ、作品全体には、チェスタトンもいうように、不思議と統一性が感じられる。「物事には関連性がないが、しかしどうしたものか、不適當なわけではない。作品全体はぞんざいに書かれている。しかし作品全体は一つの雰囲気において書かれている。大体似たようなことを他の芸術に置き換えていえば、形の統一性はあまりないが色の統一性は大いにあるといえるかもしれない」⁶⁰。そしてその「一つの雰囲気」を多くの論者は「死」と関連させて捉えている。スティーヴン・マーカスなどは「この小説のイギリスは巨大な墓地にほかならない」⁶¹とまでいっている。しかしそれは、本論においてみたように、「暴力」として捉えた方がよい。「一つの雰囲気」あるいは「色の統一性」をそうした意味において捉えないかぎり、老人とネルが放浪の旅に出るまでのロンドンでの場面が決定的に重要なものとなることはないだろう。以上で見てきたように、その場面は『骨董屋』全体にとって決定的に重要な場面なのである。それを示すことが本論の目的であった。

よって本論は、『骨董屋』の「序論」として、独立した形で終えることができる。

註

- ¹ ヴァルター・ベンヤミン『暴力批判論』野村修・他訳(晶文社、一九六九年)、一七頁。
- ² 例外として、Albert J. Guerard, *The Triumph of the Novel* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1982)がある。ゲラードはそのなかで、老人とネルの関係を近親相姦の問題として考察している。
- ³ 以下、『骨董屋』からの引用はすべて、Charles Dickens, *The Old Curiosity Shop* (Harmondsworth, England: Penguin Books, 1972)に拠る。
- ⁴ ジョルジュ・プーレ『人間の時間の研究』井上究一郎・他訳(筑摩書房、一九六九年)、三九一頁。ヴァレリーは「寓話」("Fable")とっていて〔cf. Georges Poulet, *Études Sur Le Temps Humain* (Paris: Plon, 1949), p. 356〕、「アレゴリー」という言葉は使っていないが、その意味するところはわれわれが「アレゴリー」に当てている意味合いに極めて近い。つ

まり、「ある先行現象、もろもろの《原因》、何らかの有力な根拠」といった「われわれに関係をもつ（中略）たぐいのもの」に「けがされていない純粹時間」といったものは、われわれの精神には捉え難いものであり、そのため精神は「時代とか、状態とか、事件とか、存在とか、原理とか、映像とか、歴史とかを生み出す」とヴァレリーはいうのだが〔同書、三九〇 一頁〕、それは、われわれが「事物の外観」がもたらす「印象」には「事物の外観」という視覚的なもの以外のもの（すなわち悟性的な判断など）も含まれていて、純粹に視覚的なものだけで成り立っているわけではないとする考え方と同類の思考といえるだろう。精神といった人間的な構成は、どんな場合にも人間的な意味を必然的に伴ってしまうと言い直すことができるが、そのことを表現するためにヴァレリーは「寓話」という言葉を用いているのであって、それはまさにわれわれが「アレゴリー」という言葉でおこなおうとしたことである。

⁵ 同書、三九一頁。

⁶ Charles Dickens, *Christmas Stories* (Oxford: Oxford University Press, 1956), p.7.

⁷ あるいはテキストの「内部」といってもいいのだが、ここではアレゴリーとの関連上あえて「外部」としておく。バルトなどはテキストの意味内容の重層性を「テキスト相互関連性」という形で捉え、しかもそれはテキストの外部に言及するものではないと考えて、テキストの内部と外部とをきっぱりと区別している。例えばこう述べている。「物語行為は、それがおこなわれる世界からしか意味を受け取ることができない。物語行為のレベルを越えると、世界、つまり他の体系（社会的、経済的、イデオロギー的）が始まり、その諸項はもはや物語だけにかぎらず、他の実質に属する諸要素（歴史的事実、限定関係、行動、など）となる。言語学が文にいたって終わるのと同様、物語の分析はディスクールで終わる。その先のほうでは、もう一つの記号論に移らなければならない。言語学はこの種の境界を知っていて、すでに状況という名のもとにこれを要請 ないし探求 している」〔ロラン・バルト『物語の構造分析』花輪光訳（みすず書房、一九七九年）、四三 四頁〕。本論では、この「もう一つの記号論」を目指そうと思う。テキストの内部と外部といった区分を越えた一つの「状況」にあえて迫ってみたい。

⁸ John Romano, *Dickens and Reality* (New York: Columbia University Press, 1978).

⁹ ローマン・ヤ・コブソン『一般言語学』川本茂雄監修（みすず書房、一九七三年）、二一 一頁。

¹⁰ Romano, *op. cit.*, p. 114.

¹¹ J. Hillis Miller, *Charles Dickens: The World of His Novels* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1958), pp. 91-2.

¹² 川村二郎『アレゴリーの織物』（講談社、一九九一年）参照。とくに「アレゴリーとシンボル」の章が参考になる。

¹³ cf. Guerard, *op. cit.*.

¹⁴ Mark Spilka, "Little Nell Revisited," *PMASAL* (vol. XLV, 1960), p. 430.

¹⁵ これに対してマイケル・スレイターは、メアリがモデルとなっているのはむしろ『デイヴ

『イッド・コパフィールド』のアグネスであり、ネルは夭逝という点でメアリと一致しているにすぎないとしている〔cf. Michael Slater, *Dickens and Women* (London and Melbourne: J. M. Dent & Sons Ltd., 1986)〕。

¹⁶ S・フロイド『芸術論』高橋義孝・池田紘一訳、フロイド選集第七巻（日本教文社、一九七〇年）、三七二頁参照。

¹⁷ W・カイザー『グロテスクなもの』竹内豊治訳（法政大学出版局、一九六八年）、二五八頁。カイザーのグロテスク論は、近代以降のグロテスクの、しかもそのいくつかの現象のなかになんだけ適用が可能ただとする、パフチーンの批判があるが、逆にいうと、近代以降のグロテスクを考える場合、カイザーのグロテスク論はかなりの力を発揮することもまた事実である。パフチーンのカイザー批判については、『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』川端香男里訳（せりか書房、一九八〇年）、四六―五〇頁を参照。

¹⁸ 貨幣と肛門愛の関係については、フロイトの「性格と肛門愛」〔『性欲論』懸田克躬訳、フロイド選集第五巻（日本教文社、一九六九年）参照。また、このフロイトによる貨幣の肛門愛説をうけて、N・O・ブラウンも『エロスとタナトス』〔秋山さと子訳（竹内書店新社、一九七〇年）〕において貨幣の問題を肛門愛の問題として考察しているが、経済学者の吉沢英成がレヴィ＝ストロースのいう「象徴型式」の問題にからめてブラウンを批判している〔『貨幣と象徴』（日本経済新聞社、一九八一年）、七九―八一頁参照〕。

¹⁹ V・ジャンケレヴィッチ『死』仲沢紀雄訳（みすず書房、一九七八年）、一四頁。

²⁰ 同書、二三三―四頁。

²¹ Charles Dickens, *Master Humphrey's clock and A Child's History of England* (Oxford: Oxford University Press, 1958), p. 11.

²² Cf. Philip Rogers, "The Dynamics of Time in *The Old Curiosity Shop*", *Nineteenth-Century Fiction* (vol. 28, 1973). この論文においてロジャーズは、『骨董屋』全体をハンフリー親方自身の時間とのかかわり方の発展として捉えている。

²³ M・ハイデガー『存在と時間』中、桑木務訳（岩波文庫、一九六一年）、二四九頁。

²⁴ 同書、二一三頁。

²⁵ 同書、二一頁。

²⁶ ジャンケレヴィッチ、前掲書、一八頁。

²⁷ 「分散〔気散じ〕」については、ハイデガー、前掲書、二四七頁参照。「配慮」については、『存在と時間』上、桑木務訳（岩波文庫、一九六〇年）、一一一頁以下随所を参照。

²⁸ G・ジンメル『貨幣の哲学』分析篇、元浜清海・他訳（白水社、一九八一年）、二八九頁。

²⁹ E・ミンコフスキー『生きられる時間』、清水誠・他訳（みすず書房、一九七二年）の、例えば三五頁参照。

³⁰ ジャンケレヴィッチ、前掲書、四二頁。

³¹ 柄谷行人「貨幣の形而上学」完、『現代思想』（青土社、一九七八年二月号）、四八頁。

³² ジンメルは生を考える際に、死をまったく無視しているわけではない。ハイデガーも言及

しているように、彼は「死の現象を『生』の規定へと取り入れて」いる。ただ、「そのさい生物学的 = 存在的問題提起と存在論的 = 実存論的なそれとの明白な区分」をつけていない〔『存在と時間』中、二三〇頁〕。

³³ ジンメル、前掲書、二九九 三〇〇頁。

³⁴ こうした意味で、人間の文明と死との不可分性を論じるN・O・ブラウンの論考には首肯するところが多くあるが、しかしそれをタナトス(死の本能)として心理学的に説明するところには肯けないところがある(前掲書、参照)。心理学的に捉えた「死」とは、たとえそれが無意識の領域に属するものだとしても、所詮「生」による説明でしかなく、「死」の「死」たるゆえんは「生」によっては説明できないところにある。

³⁵ 今村仁司『暴力のオントロジー』(勁草書房、一九八二年)、とくにその第三章「貨幣と暴力」参照。

³⁶ K・マルクス『経済学批判』武田隆夫・他訳(岩波文庫、一九五六年)、一一〇頁、同『資本論』一、向坂逸郎訳(岩波文庫、一九六九年)、一八八頁参照。

³⁷ 柄谷行人、前掲書参照。また、同『マルクスとその可能性の中心』(講談社学術文庫、一九九〇年)も参考になる。

³⁸ 今村仁司、前掲書、六〇頁。

³⁹ 「要するに、資本主義機械が始まるのは、資本が縁組資本であることをやめて、出自資本となるときからである」〔ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』市倉宏祐訳(河出書房新社、一九八六年)、二七三頁〕。

⁴⁰ 柄谷行人『探求』(講談社学術文庫、一九九二年)、とくに第七章「蓄積と信用 他者からの逃走」参照。

⁴¹ 柄谷行人は、マルクスの「哲学者を神秘主義へと導く "神秘" は、社会的なもののなかにひそんでいる」という言葉を引いて、自らも "神秘" の前に立ち止まろうとしている(同書、三二頁参照)。

⁴² 柄谷行人、同書、一三七頁。

⁴³ Terry Eagleton, *Criticism and Ideology: A Study in Marxist Literary Theory* (London: Verso, 1978), p. 125. T・イーグルトン『文芸批評とイデオロギー』高田康成訳(岩波書店、一九八〇年)、一八六頁。引用は翻訳を使わせてもらった。

⁴⁴ G. K. Chesterton, "Appreciations and Criticisms of the Works of Charles Dickens", *The Collected Works of G. K. Chesterton*, vol. (San Francisco: Ignatius Press, 1989), pp. 271-2.

⁴⁵ それには『骨董屋』という作品の成立事情が関係してくる。つまり、『骨董屋』は当初二、三章から成る短編小説として構想されたものであったのだが、ディケンズの個人雑誌ともいえる『ハンフリー親方の時計』に長編小説を連載する必要上、急ぎよ長編に拡大されたという事情がそこにはある〔cf. John Forster, *The Life of Charles Dickens*, (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1969), vol. 1, p. 117〕。

46 増川宏一『賭博』（法政大学出版局、一九八〇年）、八七 八頁。

47 雑誌『ハンフリー親方の時計』が出たとき、多くの読者はディケンズの長編小説の連載を期待していた。ところが、実際には単なる雑録であると知ると買うのを止めてしまった。二号三号と雑誌の売れ行きは急激に落ちていった。そこでディケンズはネルの物語を第四号から急ごしらえの形で連載し始めたのだが、ディケンズの目論見は的中し、雑誌の売れ行きは回復した。ネルはたちまちのうちに読者の心を捉えたのである〔cf. Forster, *op. cit.*, p. 118〕。

48 マルクス、『資本論』一、二〇五頁。

49 同書、同頁。

50 「周知のように、マルクスは、『資本論』の冒頭で、二つの相異なる商品が等価であるためには、なにか『共通の本質』がなければならない、そしてそれは商品に対象化された人間の労働だといっている。だが、それは貨幣を言い換えたものでしかないし、古典経済学をすこしも越えるものではない。彼は等価の秘密を諸商品の『同一性』に還元する。しかし、そのような同一性は貨幣によって出現するのだ」〔柄谷行人『マルクスとその可能性の中心』、三二頁〕。また、「すべての商品と関係しあう一中心としての商品、すなわち貨幣によって、すべての商品は『質的同一性と量的比率』によって存在させられる。それが最初からあったのではない。それゆえに、『共通の本質』とは、潜在的な貨幣形態にすぎないのである。単純な価値形態は、しばしば物々交換と同一視され、物々交換の拡大が一般的価値形態あるいは貨幣形態を生み出すのだと考えられている。事実、第二章『交換過程』で、マルクスはそのように書いている。いうまでもないが、そのような見方をすれば、価値形態論の意義はまったく消えてしまう。単純な価値形態は、価値形態そのものを隠蔽する貨幣（一般的等価物）を非中心化するかぎりで見出されるのである」〔同書、三六 七頁〕。

51 Garrett Stewart, *Dickens and the Trials of Imagination* (Cambridge, Massachusetts, and London: Harvard University Press, 1974), p. 90.

52 柄谷行人、「貨幣の形而上学」完、四六頁。

53 同、「貨幣の形而上学」上、『現代思想』（青土社、一九七七年十月号）、七四頁。

54 Eagleton, *op. cit.*, p.127. イーグルトン、前掲書、一八九頁。引用は翻訳による。

55 Michael Steig, "The Central Action of "Old Curiosity Shop" or Little Nell Revisited Again", *Literature and Psychology* (vol. , 1965), p. 168.

56 Spilka, *op. cit.*, p. 428.

57 今村仁司『排除の構造』（青土社、一九八九年）、四三頁。『 』内はエリック・ヴェーユの『哲学の論理』からの引用。

58 P・クロソフスキー「生きた貨幣」千葉文夫訳、『現代思想』（青土社、一九九一年八月号）、参照。クロソフスキーは「情欲」という点から人間を「生きた貨幣」として捉えているのだが、ここでは「情欲」を「情念」と捉え直して考えた方がいいだろう。ニーチェもいうように、人間の情念の諸形態には貨幣的な要素が含まれている。つまり、情念の生じる場には債権と債務の関係が見出されるのだ。例えばこういっている 「これら従来の道徳系譜論者た

ちは、例えば『^{シュールト}負い目』というあの道德上の主要概念が『^{シュールデン}負債』という極めて物質的な概念に由来しているということを、ただ漠然とでも夢想したことがあったろうか」〔『道德の系譜』木場深定訳（岩波文庫、一九六四年）、六九頁〕。あるいは「この極めて古い、深く根を張った、恐らく今日ではもはや根絶できない思想、すなわち損害と苦痛との等価という思想は、どこからその力を得てきたのであるか。私はその起源が債権者と債務者との間の契約関係のうちにあることをすでに洩らした。そしてこの契約関係は、およそ『権利主体』なるものの存在と同じ古さをもつものであり、しかもこの『権利主体』の概念はまた、売買や交換や取引や交易というような種々の根本形式に還元せられるのだ」〔同書、七〇頁〕。

⁵⁹ 今村仁司『暴力のオントロジー』、六九頁。「第三項」については、同書では次のように説明されている。「第三項は、二項対立的関係（相互性）を維持したり、あるいは二項関係が危機におちいって回復を要求したりするときには、必ず運命的に発生する社会関係の根本動学を示唆する。第三項は、相互性の存立のために、つねに必ず、暴力的に抑圧され、排除され、あるいは殺害される。典型的なケースが、供犠であり、身替り犠牲であり、荒地への追放であり、異人化であり、その他、いろいろと人類学的観察事例はきわめて多数ある」（同書、二九頁）。

⁶⁰ Chesterton, *op. cit.*, p. 279.

⁶¹ Steven Marcus, *Dickens: from Pickwick to Dombey* (New York: Basic Books, Inc., Publishers, 1965), p. 145.

（後記）以上の論文は、「電子アーカイヴ」に提出するにあたって、ところどころ手を加えた。とくに、もともと「反省」を意味する“reflection”を「反照」という視覚的な意味で捉え直して考察した部分（第2章）は、大幅に書き改めた。実は、ディケンズの引用文にある“reflection”を紀要に掲載した時点では、始めから「反照」と訳していた。しかし、ディケンズの引用文では常識的に「反省」と訳するのが正しく、その引用文で「反照」と訳するのは明らかに訳し過ぎだった。この誤訳の指摘は、元明治大学文学部教授の内藤健二先生によるもので、ここにその誤りを訂正することができたことを感謝する次第です。

しかしながら、もともと「反省」を意味する“reflection”を「反照」という視覚的な意味で捉え直した事自体には、まちがいはなかったと思う。その辺のことは本文を読んで判断してもらうほかないが、この「誤訳」がこの論文のその後続く考察の糸口を作ったことは確かで、その意味でこの「誤訳」は怪我の功名だったといえるかもしれない。「功名」だったかどうかは判断の別れるところだろうが、少なくとも個人的には、この「誤訳」が『骨董屋』に関するその後の思いのほか長期にわたってしまった考察（2年半後にこの論文に続いて「視線と暴力 『骨董屋』試論」を同じ紀要に発表）の起点にもなっているので、誤りを犯したことを「反省」しつつも、ある種の感慨も抱いてしまう。

* 明治大学文学部紀要『文芸研究』第六十九号（一九九三年、二月）三三 六六頁。